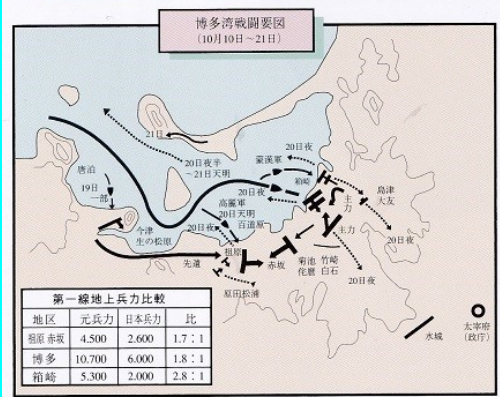
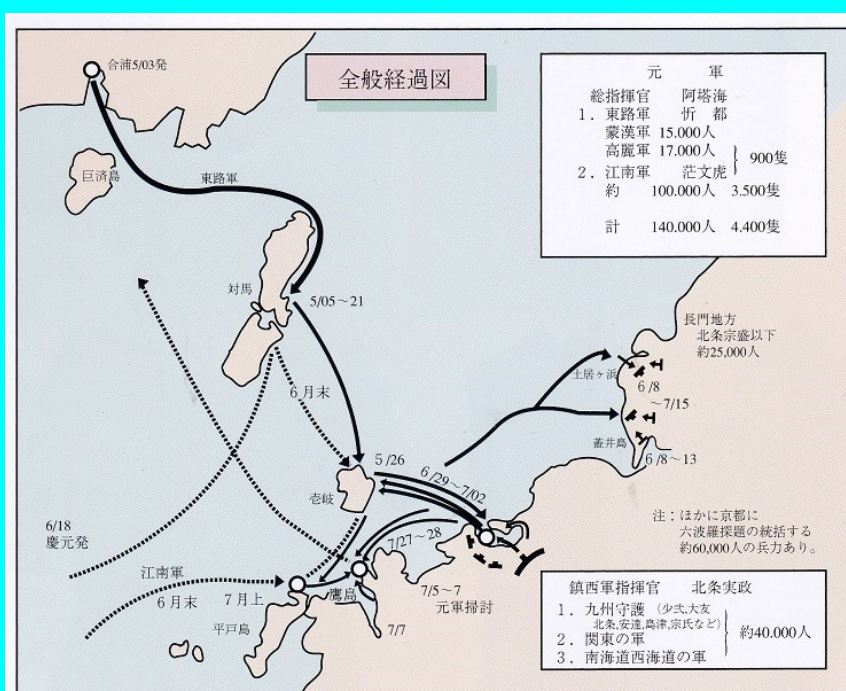
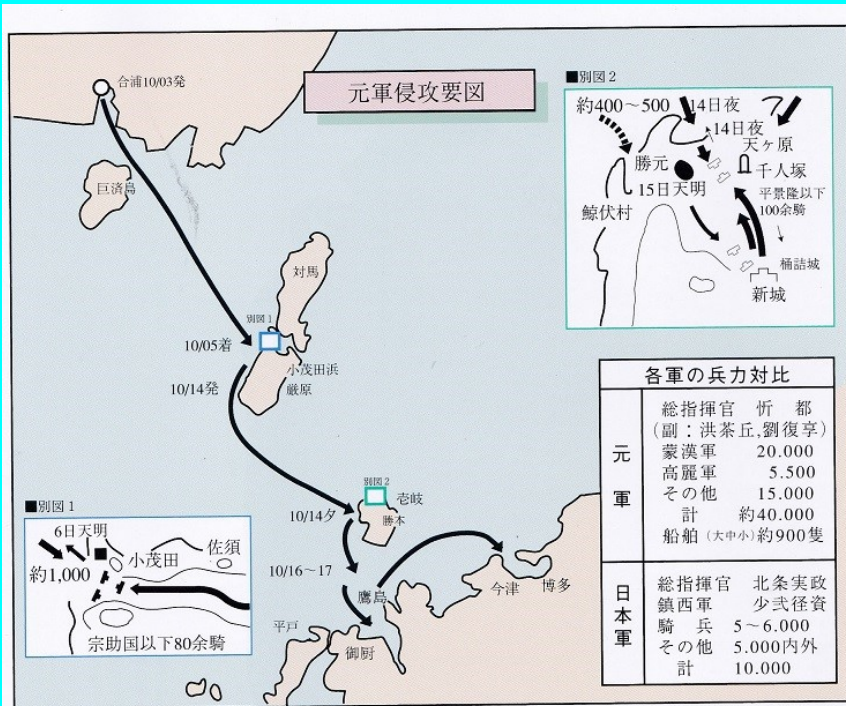


補足資料1

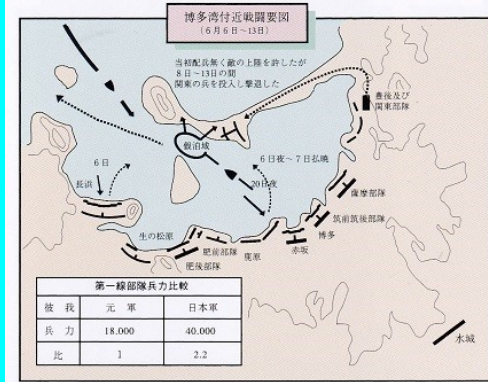
元寇史料館の史料による文永の役(1274年)と弘安の役(1281年)における元軍侵攻図



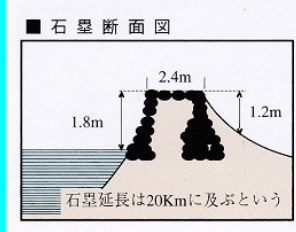
文永の役説明

文永の役(一二七四年・文永十一年十月十一月)

蒙古・高麗の連合軍は、四万人が九〇〇余隻の艦船で日本へ来襲。対馬、壱岐を攻略した後、二部が十月二〇日今津の浜に、主力部隊は百道ヶ原沿岸に上陸、大宰府侵攻を企てた。当時の日本軍兵士は、重いよろい、かぶとで身を固め、名乗りをあげる個人戦法。それに対して元軍は、軽い服装に集団戦法を用い火包や毒矢で日本軍を苦しめた。鹿原高地での戦闘後、日本側は水城まで撤退し、元軍は停泊した艦船に引き揚げた。一説には、その夜大暴風雨が玄界灘を襲い、大船団は風雨に翻弄されかたりの船を失ったと伝えられる。



弘安の役説明



弘安の役(一二八一年・弘安四年五月八月)

世祖は、文永の役の翌年に再度使者を送り入貢を迫った。時の執権・北条時宗はこの申し入れに怒り五人の使者を相模の龍之口において処刑、国論の統一を図るとともに再進出に備えた。また、博多湾沿岸に石塁を築き、実弟である北条実政を総指揮官に任命した。引安四年夏、総軍四千四百隻、十四万余の大軍の元軍は、二手に分かれて進撃を開始した。一方の東路軍は、前同様に対馬、壱岐を攻略した後志賀島沖に侵入。日本軍は石塁を攻防戦に、五日間にわたって元軍の上陸を阻止した。このとき、元軍の一部は長門地区に上陸したが、日本側の抵抗で撤退した。もう一方の江南軍は、予定を遅れて平戸に到着。その後合流して再上陸を行おうとしたが、七月三日夜半から大暴風雨が来襲。肥前・豊島付近において大船団の大半が沈没するなどの大被害をうけた。これが俗に「神風」と呼ばれる現象であると言われる。